



門へ 5
號 4408
巻 2



一串抄卷之下

○題詠の部

さびよのつらやう。清秋の海に物言をまじへて実
用し。物言は季節の海物りう。余はききある。
ゆゑよまの海物のふくみ合のくき序を解
きんききある。従ふ海物の梅柳を賞詠する者
の句は六拾巻の備はあらん。後くはあらん
その境界ふ存せざる様管成は名所未の題を
絶へ。そは合試く空用の備とあらん。又ききある。

昭和九年
九月二日
購

故に今も此處を以てかゝるもの

一とせよ。夜つとまゝにありあう如

古畑や昔ははらへ田男とて

おんよつたを六堂のりおあま

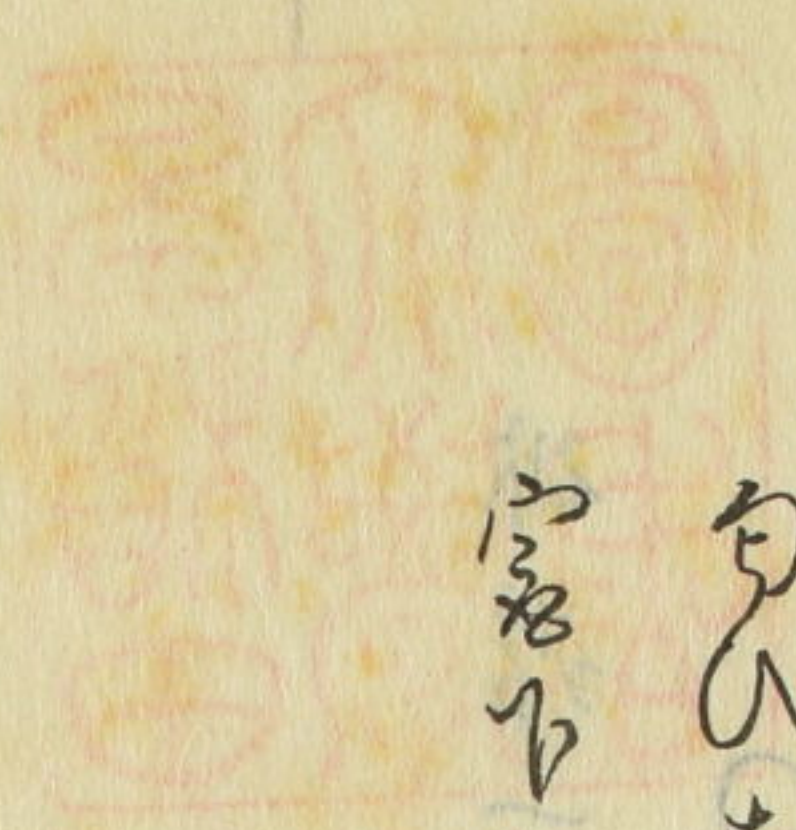
蘇ちつならめのいふの義をいひてはるし。いふは

これ一葉つ夜の夜もあつて示し。いふは古畑

のいふ古畑のいふを諭し。いふは

白ひも此處菜をいふ。新妻のおふ者すを

おまのいふをいふ。諭し。



ゆゑにこの古畑や難波の二年城

あれは二年城といふ古畑のゆゑに附のい

ふる。難波の二年城といふ人料あり。これ

和爾わにが難波の天白をいふ。いふは

今をまゝといふ。いふは

古畑のいふ。いふは

ゆゑにこの古畑や難波の二年城

ゆゑに。いふは

ゆゑに。いふは

たれ。おんのりと薫るを教はるるを候しせいしう
あり。日影のこの門とゆふるをを梅まゆりや
あふくや。清み候る思ふ淑氣催黄鳥まよ。
日光ハ淑氣。梅ハ黄鳥まよ。ゆめハを威のあふ
折子候ししもの。

かぞへ来ぬ屋敷の梅柳

られ秋大秋のやまをよ。長閑みんは淑子
梅園あふく。梅柳あふく形実ししをまよ。
梅柳のやまをよ。せだ。うらの若く折る。

妻もやけしとらの子白と梅

色喜色のやけ。月梅日陰の辨をれがよの終し
とむむ。一旬のやけ月のもよふよふの。数枝
示せり。日陰のつ物をよけむむなる。つを諭す。

梅柳さそひる花うな女。那

られハ梅柳のやけ。女ハむむめとよむ。
まゆり。みやはる。哀。物の書
られ傾る。むななり。おのつを屋つ。と。まよと
ゆめまよと思ししもの。

おの陰縁子 此の 旅 海 舟

これ此の向の安をせしむ。こゝに八名を返す。

鐘鳴て花の香をほく夕の光

これ鐘を撞ききりの。まをさすのまへに消るす

名あるをとおる。たゞの体裁なり。鼻を衝くも

まの夢語なり。向のこゝろに只既に入おられた。

おのまを難苦しとあり。

木のりん汁も餘り松のり水

この汁をゆるし松のり水は昔あどありと。こゝに

花は帰しとそれともぬがさといふあり。

難なる奴花はるる惟が被れさ由

これ花紙賞就み地をこゝろ向ありん。惟と何ま

被さるるふゆされとあらせぬのちとなふ子娘

あり。まゝとを賞するれ何なり。被れ奴もいづ

らみ儲くる程をすも。彷彿をれた。かゝり

何の辨を此調のまゝと。古今集の序をみる

まゝと被の辨判を供し他をこゝろまゝ。まゝに

こゝろまゝあり。

神句のよきありては波——くも夕風もよるや藤
とのびて。生長のやまに富州なるを諭せり。
夕の字ふ力あり。生長風なる場合あり。ある
おきて。歌のあはれを諭す。つゝの字ふ力あり。郭
其ふるまきふははらふをせり。神多の言あり。
と諭し。くも。富州の句。剛柔を合せの格。く
かへ等々。例はあへり。くも。大足中かとの
系のお妙なる。くもかたぬ物もそ有る。くもた
ちむれよ。くも。の格。きふ。早業。くも。くも。くも。

笑をせしうらなは

夏の月汐油くくゆく赤坂や
られ東海通は稀なるす。くも。くも。くも。くも。
寝夜を諭し。赤坂のけは働かせ且流し。のや
み歎を合あり。

一夢はくも横くくや郭公
郭公夢横くくやあけり。くも
くも。くも。くも。くも。くも。くも。くも。くも。
くも。くも。くも。くも。くも。くも。くも。くも。
くも。くも。くも。くも。くも。くも。くも。くも。

の本情を論——
 と世を聖の中へ用あり。句をたのむるにや——
 花を宿よとてしめ終るもさるるやど
 此の集中も昔の終るるのほど。牡丹はあま
 なる。これ花が昔は才媛なり。
 夏の秋や花くも——冷物
 蓮の葉や夕白てせ——
 初句中のその字温音あり。後の句は花をく
 盆云精霊むくの句をく——。

ころる暑く吹や一樹の松の音
 くれ暑く涼き花風を暑くは清く——
 妙あり。一本づつわの涼風を暑くは奪をせ。
 却る花風をたるとあり。天地間ふもあ——
 大暑を論——。

毎月や亦も花の秋まはし
 花ふの樹の葉越し——
 七夕や花を空の——
 九月を並く今もふ必序破意ありとを。

こ句初ハ近増る思を述へ中々あつてぬ
勢を飾へ後々杖の倚もきとかけし星の
外を擡

目あかりし時やあづの後の事

暮秋の移り易さと歎くもつなう。階外
新月の光もくもくぬき輝き思ひせ。ふ海舟を
し暮方の。同心なく又波を来くるともあり。
こ句を他もふ傳へ用との分あり。体と花まる
せよ月もせよ。其物の外をそ傳へいひ

なり。用とそ物の外をそ傳へいひする事あり。
さしを中秋の月と詠くもつなう。九月の物と
るや。時合生水夜六婁宿もく空をそ暑乃
煙あり。天漣はく波もくもく。皎くもくもく
也。さしを。浮もくもく。沈むもくもく。進もくもく
あり。さしを。初もくもく。その外形もくもく
物なり。この外形もくもく。古人の外もくもく。名月もくもく。擡く
あけし茶碗もくもく。しられ体もくもく。破れど
茶碗もくもく。世事もくもく。天もくもく。月もくもく。おかし

うらむるを喻し。まづ用の白

名月や花うらむる棉 白

名月や鶴の毛をうらむる衣を予服

是ハ月を空にうらむる其光をを喻し。月の
白なり。物さしは佛語の本意に於ては
いたゞ。物も用も向ふをさし或ハ物さし
居る。を傍を白ふ物さし居る。其角が
寺ふ物の合あり。月の光をさし居る。只物さ
しのうらむる。物さし居る。合

もあぶき此良款と思はせし。

雲形一人をゆき月を

名月や児をうらむる堂の縁

名月や我世をうらむる

名月や我と華架の園

名月や池をうらむる

名月や花をうらむる

名月や池をうらむる

良款のうらむる有る大体はつらる。初白

休むを以て。休まぬ後の月よめられざるは
喻し。此のふるも妻の思ふはたふ月を教をせ。
思ふ必まははく付なれた。妻の思ふ集り方
は貴家此集ひのちをせし。ま次回句は
月不周を記し。なる。後の句は桂く人成
し。金。月を採りせし。これかしく休用
の句面をまぶし。傍を成し。月を喻は成者
とん。これを傍をまぶし。句意を採るふ於し。
必その分。めん。古歌の傍を句をせし。金。まを

採り。志むるなり。事のなり。辞の一こ
妙なれを。ま。ま。金。ま。句。或。ま。辞
の。若。ま。の。面。ま。ま。ま。是。は。何。集。の。歌。の。意。是
ハ。彼。辞。を。ま。採。り。ま。わ。り。後。ま。ハ。此。者。の。ま。を。失
ふ。必。め。ん。

箱書や。めん。の。ま。ま。め。位。の。ま。ま。
め。位。の。ま。ま。ま。ま。新。光。を。教。は。る。ま。ま。今。信。を
箱。書。を。喻。し。ま。ま。割。は。ま。ま。此。後。の。場。成。ま。ま。
け。ま。ま。の。前。ま。ま。辞。ま。ま。句。意。を。収。め。り。後。後

慕ひを新しき世に用ひんと欲する所の如くは。

落おちれば目れまの茶中へ那

茶中の落茶の縁法をよむねの縁法を好むるを

揚ふ人あることなれこれなるといふことある

もの多し歌詠も人の情を他ももれあり

風や顔もれつむ人の夢

骨柴やそれとるまゝの蝶の壳

初め時流れおひと解ふ例の徒云あり。あ

顔もれやよだみも夢も風樹木を

鳴るさげが傳きを喻しつるを異を

み。御のう人の息と由せる非なるべし。後世の

かふは秋風の吹海うらう人の息と何なる秋風

無しむんその教色おあつてもさあ。秋風

の音もあつて。其誇しめのみをさしを喻し

つるをうらうにけし秋風も。虚象のあつた

ら。物態は形実するのけぢのあつた。斯有

べきあり。骨柴は中七文字を風速を勸

めり感あり。

好く賣れぬ河にれきり美珠

夷倭砲賣りし袴着せあきり

初句のうら後厚のめづりありし。今も夢

ろくも未だいつくふ鳴ありとせり賣と

名づけし。今も海物の鮮あじきを賣取まをる

し。一花厚ま。商人の振賣とせば。

河をれとけり。慨言働るべ。さるる振賣と

有といふ。いさゆる泥実病ま。風流も亦何

あらん。次の句ある。砲くは袴も。海物を賣り

る好京河にれきり

掛し。ふ恋の句を。いせむや

かけぬの冬あき。わ。凡回あふり。今の春

の換りも音も。これ春のちか。いさよある

べし。さそ風雅の花か。る。詠をいふ。あらん。

川恋せ。びんも。あ。い。海。い。あ。の。あ。あ。あ。

れ。い。あ。あ。

年ま。い。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

これ。い。あ。あ。

つゞけれも菜のよ摘ん年の暮

けつゞけれ流るる年此流な〜む

られれふ年高の句を〜。お屏き〜る体裁な
〜。句高のち明なる格の〜き〜夜〜後の
句流ハ忘の字を喻〜り

依の古あ骨な〜〜厄〜〜ひ

佛舌無骨の方便なる〜園〜〜翁が知る所〜。
今の世除釈の門を〜る本柴強者の。うその
実なる呪文を〜。初〜〜上篇の賣まひ俵ばた哉

あ〜〜なる〜ん。さ〜〜翁う在世明曆〜う元
塚のあ〜〜凡四十年弱。その志〜〜画一な〜ん。
集中混〜志〜〜お後ル〜〜ある事
〜。今〜〜れ句を〜〜只その志〜〜画一
帰する秘法を〜るの〜。

あ〜何ともあ〜この〜〜〜飯とけ
針まや〜存の拙打〜〜〜ら〜る
そ〜〜か〜拂子や〜〜〜と〜用〜
附るを〜の〜か〜か〜〜木の香

しつれりや舟は帆つるふら付く
魚をたふと志あしは年らまれ
語の夢よしつる牛をうる
全屏の松の古きや名ありを
くわすんも年よれ初しつれ

○境界の部

おほよそ一風を揃つる若くは境界す。
隠者素のふら限るねど。ゆが動靜そのはら
なれを。悟り致るは境界との。されを
條下のふら境界を。まきくまきくまき
夜白のりるを。或は桃香庵の勢
草葉ふら。まや伊勢の初なる
りはつ瓢ハかりを。我より那
初白夜りのと。庵中つ物ルあり。まき

桃妻とくみづ、く隠者なる事をも名せり。
世人のゆく事も、まじりし事あり。中の白くは、
りふ草花、残いとも、松竹の葉を、
鶴、鶴、子、齡を、か、ん、境界、も、あ、く、ね、を、く、
喜の、あ、る、く、世人、は、あ、る、は、く、ふ、仰、く、
の、た、り、く、は、く、く、ま、る、く、後、なる、物、つ、く、
前の、後、の、あ、る、ま、は、く、ま、る、く、
く、く、ま、る、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、

似合く如新く、瓢、米、あ、け、井

初、向、也、あ、ま、く、や、ま、る、く、
り、り、集、中、身、と、し、ひ、或、は、
境、界、の、白、と、知、り、

流、中、く、く、く、く、く、
沙、白、た、れ、の、字、ま、く、
似、字、ま、く、を、あ、る、く、

あゝ〜のゝ、世俗のそまねれりきと歎〜
〜。吾の既成が横鼻禪とさして未免俗
とらひ〜伏あ〜ん。

人よ米を嘗〜
よの中へ宿〜はわよの庵

閑閑説

然るゆゑや屋大鏡おらに門の垣
本はきよはねた〜はわ〜

初め宿〜はのゝ。世界と万里の外に控〜

情成示せり。然るのゆゑもみそ文阿るは
ま〜本境界より明あ〜。

然るゆゑも新〜食〜男〜
然るゆゑも又新友あ〜

此のゆゑも。初め其角の豪酒を戒め〜
〜。飯ハ酒あ〜。然るゆゑも新〜
昔も其角。その戸あ〜も夢冷あ〜
と〜。後のも〜。一
方あるがゆゑも新〜

○端書の部

二の閉口題四の

大津絵の筆のちよめ六何佛一

それ皇國の故実を亦た。閉口佛のせつと
なり。故ておしそぬ事とていふ。いふ
いふ。故ておしそぬ事とていふ。いふ
いふ。故ておしそぬ事とていふ。いふ

曲あり亭

小波の敷のまらき年始成

それ曲水に組子多きあはらうりて。故て
奇なりや。まらき。年始成。故て
くふ。故て。まらき。年始成。故て

風麦亭

表をまらき九の聖山のり

この句は。表をまらき九の聖山のり。故て
亭をまらき九の聖山のり。故て
まらき九の聖山のり。故て
まらき九の聖山のり。故て

秋風を吹流の庵を渡る

梅ありきこのよや露を盗まじし

これ仙鳥ありてありしを梅和請ふ様。唐紙

清指さるるを喻せり。白梅は実るに露を

まじりし也。その実るに露は又露。盗

まれ。これ梅。これ清指の利口なり。

梅をき所。年を越して

これ人の荒居ておる花の妻

これ白色の白なる也。びり所是らと申す

皇子達磨と出合の事をもあるるといふ後ある場
書こをすまじゆあか¹の字を流るるよみ梅香院
の才を流るる。かろるひなる中は菰若く我を
我斗とのゆ。白色の白なる。あはれ世時人傳
といふ書ふいなる人ともあはれ依見の梅ありと食
の如くわらむ。ちまかひ。中はまみと梅前
羽倉氏の前を。書を借る。名あり。梅は
名をいふ。身をゆりて流る。い。や。な。お。た。の。倉
氏。よ。東。里。其。人。の。居。る。と。い。ひ。て。生。流。の。秋。を。梅。

おろそかされたる花を世よ造物なれかかると異人え
て愉しむるをなすもあはれ

雪のつらさ

雪のつらさ

あやむいのか白魚。あつき事へす

おれ喫のうごきおやわらふ白く成るも海辺なれ

白魚のつらさあるも愉さう境界の於新書は白ふ

つらさや新年。靴米おけおけ一冊哉

雪のつらさ

をいまたのつらさるもやあるの下

任らぬ葉のるをう。をいまたのつらさるも

つらさるもつらさるもつらさるもつらさるも

られぬ葉の巻のつらさ二冊ふらつらつらつら

よせつら

雪のつらさ

雪のつらさ

はつらつらつらつらつらつらつらつらつら

ぬのつらつらつらつらつらつらつらつらつら

り又抱り。ゆゑは日本欲成たのもぬや。其とす
あり。

海運に陸運を以て

其枕をくしの花をくすも来よ

よきの花とくかの花好く情をうけせよと示
せるなりん。

水戸よりく世年を経て友平

のちあつひの中をさする様

のちあつひの中をさする様

けいけい六あまをあつひのよは笑。あつひのあつひの
よはせしむ世ごとあり

友代のみつとつひのくんの家

友代のみつとつひのくんの家

友代のみつとつひのくんの家

おのふ連と俳とのな身を命しあつひのあつひの
同境界を合はしむるあつひのあつひの

あつひのあつひのあつひのあつひの

舎のせん藤の枝あつひのあつひの

鹿の角まじりつゝの別れ

知見亭

枯れ果てた枝の影のひかり
かたじけなくも旅のむすび
初めは枝まじりつゝの別れ
と書かす。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
の別れ。知見亭。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
を。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
を。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび

鹿の角まじりつゝの別れ
知見亭
初めは枝まじりつゝの別れ
と書かす。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
の別れ。知見亭。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
を。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
を。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび

甲斐の山中

鹿の角まじりつゝの別れ
知見亭
初めは枝まじりつゝの別れ
と書かす。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
の別れ。知見亭。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
を。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび
を。鹿の角の匂。もろく書かす。旅のむすび

前栞庵より

さみづれやも紙をけしるも書はつと
此句表す庵のさみづれのかのうらうらなけり
あり。おきつさみづれの陰ををうし。裏のう
ろへ。此庵お念ふのあうらうあられた。かのうらう
の百首を紙を思はせむ。いへ。此句の事。今う
さみづれの前栞舎と書し。いへあり。

さみづれやも紙をけしるも書はつと

さみづれやも紙をけしるも書はつと

此句ハ芥子なる事とらせしるはもつ体
裁あり

月瀑亭と栞別

さみづれやも紙をけしるも書はつと

さみづれやも紙をけしるも書はつと

又越むさみづれの中いさみづれ

初句ら、栞亭人の名紙を忘れし。下六は
友の勢も我を忘れど。命あふ。又越へ。ま
あり。次の句ら、の中いさみづれの中いさみづれ

くろく命何ぞもく又かふる物故貴航よるよ
とをり。

寺子集くはむと思ふる月んつる

月んたる夜ふりくも白くは

世平白く梅を一枝みそはくお

新次の子宿這又やみおさる

初白根本も秋六言も秋月と場を何うあるもく歌
さあうあひて味の何うか之場を一枝新を裁入の格之南
のみさうおる夜ふりくも白くは

骸骨の徳の賛二句

稲妻や鳥のまが膚の徳

ひきあづるや魚焼は徳の徳をくれ

角力れ賛

裸身を押し合ふものや月と風

編く袴は不敷もあつて命はとられ常なる。は

ら白体とゆへうとらひ

思ふ者ゝ画平

新うゆかりもはかしくひられ



魚好の賛

秋の秋をこころふきつる清き

画賛

一 竊心あるぬ蒔のこころ

賛らるる貴きまがめとあり。栴むる物行く。たす
くもの何う。然息の白銀相ありの表ををらぬ
こころとをこころよき貴きこころ。次の魚好六の
法に辞あり。秋の秋をこころふきつる清き物
ふらと何ふよとあり。まこと栴めこころなる。秋の

力画あるこころ意はきぬとらふ辞ありたまけ
こころあり

中とらふ巻下

協何と音紙何とあり秋の風

中栴れる種あるふ影を探るこころを詠せきこころ。
故と事しする佛踏の一風あり。栴を中
こころ栴めこころ。他者の一音特とあり。深
人の虎と大虎と書こころ。我も此方る。我も
栴こころ。これ風流の者もかあるたふひとあり。

何ぞ撰をん

車庸亭

秋の萩を打露〜〜新うま
車庸の熟字未詳。がみうま庸ハ考〜〜
すうらち中庸をれた。うの富湯を叩く中を
ちうら向る雪を焼くよ〜〜のき〜〜を考〜〜

東照傳をん東照六根氏を更

科の月の白を形をん〜〜と大茶

妙典の巻不隠る萩かとし時

絵を産〜〜

八月の絵を机の回隅の那

八月を〜〜机の回隅を回大ようけむき〜〜

何ら〜〜をホセり

武苑守泰耐仁也を先〜〜

改以去欲

名月の出るやあ十一ヶ條

おも〜〜と名月の萩や茶田山

ゆらあ千丁茶の向。後の白ハ茶田山の向なり

杖の日のちろくやうね松の夢

旅行

あつり〜と日ちつてゐるも杖の尻
さう傳ふに杖や那きもの一ツ獲
ちのちや聖小僧の後の色
箱起る紙をよき世の秋せえんを

初ハ杖夢なるなり。さうの六松つてき者へき色
なり。秋風の体もきまられぬとあり。旅行
初めのさう六日の色ハあり〜ま〜あり〜色。旅



あつり〜と日ちつてゐるも杖の尻
さう傳ふに杖や那きもの一ツ獲
ちのちや聖小僧の後の色
箱起る紙をよき世の秋せえんを
初ハ杖夢なるなり。さうの六松つてき者へき色
なり。秋風の体もきまられぬとあり。旅行
初めのさう六日の色ハあり〜ま〜あり〜色。旅

言ハ初者の消安させんて色とのひとある
も色即是空と観しつゝあるべし。とちめ乃
白。小法と追分の留ふと食の執着をうき
存しつゝを死して此の心ありとぞ。うらふかのうき
世に帰る時の夢しつゝある観のちひよせある
べし。されば心を抱く經歷する業ありつゝあられ
せんとあつた。

千里の遠き路程をたしめ
形をとりしをみれば心は志むべき

形をとりしを多量の死骨とがかる観おふが性
のゆゑとらる。

芝柏草

林ありき隣り何とせむと人地
られ林色のものをやむすべしあり。家み杖をた
ゆらぐ流しつゝを。うらみ柄をみる隣人へけり。
まゝ開つる句へ

業名の本當ちり
冬牡丹子をよみ浦のわききり

けりてり書居りけり土大根

此句も書居りけりけりけりけりけり

大聖持の金昌寺のやど

庭掃くゆるや寺中ちる柳

佛言拂地有五勝利あるの地よよねるあり

旅人ともんて

るもさく人あがむる君の如く如

第根らひ人よもまづけりけり

初り香途のかち河もさよ下塔ぬ旅人のさ中
たまげられたるをかきけり其もさく人あられは
とあり。さく人よ何れも例のさく人ありけり
せりも。流の白もさく人ありけり。さく人の深川のさく人
あどあをさく人あらん。

師老の海見んと船さく人あり

海著る鴨のさく人のさく人あり

これたの海の白なり。海著る鴨のさく人のさく人あり
鴨のさく人のさく人のさく人あり。一併裁し

あづ〜まのやわ〜きん十年
 搦きんや茶を風の枯も志〜
 くら〜の林集中よ羨〜。〜
 の〜なり。句揚の理ふ言〜
 必〜るま〜すんきなる。け〜
 一十年わ〜きん〜
 常々風の今ぞ枯と他〜
 平求め〜かく他〜
 存忘と秋あるとの秋あり。

搦やあるき蝶の世捨酒

られ棄つと世〜
 うの股お湯のたぶひある〜
 つ〜
 の〜
 あ〜

森見ハ松凡ハ里宵月を教
 明〜
 星濤の周我ん〜

大目枝やーを川橋ー一 名

これ此のり空海師の書きたるむれ書乃
し何のあつたるものぞ。されば一書かがる

そつと物れ。識者ふらふやー

喜ハるの常利くといは浦人

のいささや

常利くも硯紙物とわ放の浦

貝書のはる川のもよやわ放の浦

乃書み初放の浦とて世に存しを

袖白のめ文字常利かしたのかとぞいふことり。
才六貝合のおりひよせよと。いづれもらるる所。
才六陽書のをあきつるもさよ。初放乃浦
の絶景たるを喻せる句。もの表ハ書た別れ
ををー。慕。漸く初放の浦より。世に存し
と物。こら。裏のを六書た別れ風機を失ひ。れ
ど。今此浦は来。見れむを。ゆる。まよ。も
換く。面あ。初放の浦を。ゆる。向る。
此例す。故の人。不。この。ふら。み。し。ふ。と。あ。て。二。月

七月八日「此の事不^レ二を考へて一なるか」考へ
二月の七日八日長閑なる日。あづき湯に浴び
とせしむ。裏のころ六月中旬迄は水きりや七
八日かゝる。漸く水二の替をぬくころや
なり。あづき湯の形が序をたたく人裏の交
の七日八日はあづき湯なり。あづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の

幾度かあづき湯に浴びし。あづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の
あづき湯のころの趣がすあづき湯の

いせよ
津城や思ひの心けし涅槃像
白雲の影をみる。津城の影と倭姫世に
佛法の影をみる。津城の影と倭姫世に



と定めしるるを

美濃の玉猿橋

猿橋や蝶を居あつる筈のよ

此の蝶も猿もあつる合せ。居あつるを橋乃
危きを喻し。

春風や一夢うつるを筈のよ

あつる名義の地中。あつるを詠し。

羽黒山中

あつるや春と薫るは南の山

羽黒根

昔れ月むの物は一飯瑞の

源一とわおのつる月の羽黒の

雲の春幾つあつる月の山

初句は南谷の句より。春の節は友なる。月は薫
らぬとす。つるは。春は他つる。一は。一体裁の中
の。つるの。山の。羽黒。未詳。法邦の。つる。あつる。あ
つる。つる。保食。神。あつる。あつる。あつる。あ

あせふい子 誠哉 死しき 靈と成るふよれるな
るべし。夏の月 六月の月 病むをど
多き所よりひきくもなきん。才六女の態を
山の名残のひきくもなきん。才六女の態を
山の名をせんか くるまなり。

白川

早苗も我も馬鹿日教うな
これ子苗の馬鹿も我旅の日教を歎
周は枯れもふ 白川の馬鹿とよめる 能因成就

つら

麦刈し 稲刈し 家へ
こわれと 集めし 家へ
涼しき 水も ぬる
初句は 本歌を 採りし 麦
秋の 名残 ありし 白川
西と 只一筋 ありし 水も
けし けし 白雲の 影も 田舎の 浦
浦と 只一筋 ありし 水も ぬる

おもしろく急流をゆくを愉しむ

こころの雲吹寄せ大江山

さすきちあしりし月の大江山

物々端ちお流ありしつ田の宿平 遠るを
けり。句をいふほどまとも吹寄せとつらう。大
河なるを愉せり。次もたぶふり後アうなるを
ぬふ。さ月の今ふりけり越しをたもう。大江山
を愉せり。

こころの中より

いのちなるものよまき下物原
本流の雅をを殺しし俗物お流すはをいふ
の地なる此のちの井原のいふあり

越の申し

中山や越路も月々又今

これ越路再行の今をさすし此のち雅を
たり

雪の白しうらむに保のあまれや

此の保ハ招りしを捨るは白くを洲よりけりてた

よ八様の深海水が混じりて見ると移る。今我
又時と香白ふけり。松の字をさしりて
例の俳諧。

武蔵舟や一寸おとの森の夢

藤六毛物中は若声なまゝと句名時あり

蕨根の関城

月半かゝる時や流文は月あり

は白のふりかゝるれのやうなやとあり。歌る人
あつてはもたつてふらふら都へとをやらうと

なりぬ二六はくく名長女奴よきまうとむ
そがあら

関城より見るうらうらみ

そよ隠れしう

常時ふあつてをぬりて面白

そよふれあつて隠しせをふあつてなる人。一
なるう六都くた申の物せつてふふ辱とせ乃
中よ絶つてさつてふあつてせふのうらなる。

崑崙人きく葦葉方おれ仙

月澄々林を入るの途のふ二

丸石二の辞ハまふふとて地をこれ帯きり。
契沖のふりたふよあ光つもの影のうらまを
ふれふふこのうねのまふそ有るこゝあり。昔
句のうらふ月さくえ思ひて故ハ天地間も物ほ。
只此に切つる秋風のふこのこゝあり。其角の
月のふふふふ入る日やや輝やまふの月

ふ二の香梅よかくれぬかや
これおのふし梅ハも禁海及ふあふくそ名物。

折け樹道やふふふふふふふふふふふふふふふふ
り〜ゆをふふふふふふふふふふふふふふふふ
これ或は梅の梅よまふふふふふふふふふふふふ
〜ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

芙蓉の蓮よりふふふふふふのふふふふふふふふ
香を清くふふふふふふ。ふふふふ空あけけけ。
何方のふふふふふふふふふふふふふふふふふ

一尾 芙蓉の時ふのふふふふふふふふふふふふ

せ加つて地勢魂をさるやまへ

よみこし

象沼のるや 西施の 楳の如

らこの象沼と西施が。雨と眠と對せり。
一本に象沼や雨はと出るなり。西施は眠を
いせくも象沼は雨のうらみも。枕を
るも眠も西施のうらみも。女をを象沼
晴る方とさるや。一の交治し。且其の
細道の文も此付現る雨あり。まゝと東坡の

湖の詩をいせる句とせんも。西湖雨亦奇
西施清濃粧とあり。そのもかゝれば
書は越え。只西施をいへ象沼を喻
いせぬんがの。

いざよひもやい。文科の郡うか

おの地は月の名ありと。いぬは又不可
道はさる中。秋の天を戴くを。いぬは
件とするるなり。いぬはもの字も合
ならん。文科の不可の。いぬはもの字も合

言まきよの碓井をさるる

初ふやごご喜つて見よしねあまや

これまよ玉のしるるを諭せし

道くいのひの縁に集り
出づ管見の河やま
初あえ
初あえまよ玉のしるる

吹ひ移きてる浅河のあまや

これ浅河のあまやけしるるを諭せし

碓井なるまよ玉のしるるを諭せし

河の浅河のあまやけしるるを諭せし

初風や前も島とあ破 関

初風のあまやけしるるを諭せし

あまやけしるるを諭せし

あまやけ

石のあまやけしるるを諭せし

初あまやけのあまやけしるるを諭せし

初あまやけのあまやけしるるを諭せし

初あまやけのあまやけしるるを諭せし

初あまやけのあまやけしるるを諭せし

初あまやけのあまやけしるるを諭せし

初あまやけのあまやけしるるを諭せし

初句波の月を洗ふた者のゆりなれを場の句と
はぐきなり。後の句とたその樹の春を——
あふすく——あふす。今うき世の氣をまろせ。
及——奇案をきくせ——一体裁し

枯——三ッや伊弉の山おれず

伊弉ハ生物く。枯——まろく——まろくをきくせ——
まろく。これカオのふちを——体裁なり

八羽や天の橋をたなまぬ

この代京あ方よりねふゆ合ひ中へ切度

文珠をまろく。まろくを給んどたをまろく——の
や——八羽まろく——まろくをまろく——まろく——
まろくをまろくまろくまろく。

葛城まろく

まろくをまろく——まろくをまろく

これ神ハ——まろくをまろく——まろくをまろく
まろくをまろく。まろくをまろく——まろくをまろく
まろくをまろく。まろくをまろく。まろくをまろく
まろくをまろく。まろくをまろく。まろくをまろく
まろくをまろく。まろくをまろく。まろくをまろく

初ての故もなるは事し小勝くも愛あしく。あ七
みの粹ありといひ違つるもの能くもぶるもの何れに
故事し古流の傍とほきまふ。或ハ筆をめて諭す
ぶきし物しを何とせん。むし一有れば花
あといの人物此の理と人々曉くんとする。あた
ち不解せし曉すぶきし物あり。胡蝶の夢あり
諭せしとて。今その物化の趣をたんとす。あるは
利言とす。若何の。一日所用のやそ隣里へ行々
ぶ。道のかしをらなる。鳥の。老人二人のたかひげな

泣居る。利言とす。若何の。一日所用のやそ隣里へ行々
見れしといふ。かき事あり。今齡すくは千
あはし。人生のさう何れを。長く死を人の必定
なり。されを別途あり。此は世界を去る。又千別
途あり。ある世界にぬく。のよ。あるをゆり
かきし。又い。なり。利言とす。若何の。あた
あはし。の。あ。人。あ。若。今。死。と。別。途
ある。世界にぬく。の。我。と。別。途。あり。の。一
あ。の。世界。と。去。る。や。今。世。別。途。あり。の。世界。へ。来。住。む

こよね二冊中野らあひる

うつ—モ—装禊も

—と—不々々々々々々々

大正—ミ言—翠夏

行・ユリ

